

- 自ら考え、表現できる人（創造）
- 仲間とともに高め合える人（共生）
- 心身ともにたくましい人（健康）

Sumika has been to Australia. Her Print work has been to Boston in USA.

好花さんはオーストラリアに行ってきた/彼女の版画はアメリカのボストンに行った

須賀川商工会議所青年部の小松田建一会長さんから、すごいニュースが舞い込みました。

上記青年部主催の田善顕彰版画展で昨年度の田善賞を獲得した齋藤好花さん（現在3年生）が、オーストラリア海外研修視察に行ってきたことは、本紙第17号でお知らせしました。右は、田善賞を獲得した彼女の作品の写真です。これが、アメリカ・ボストンで開催された「CWAJ版画展」に展示され、しかも、ボストンで最も多い発行部数を誇る日刊紙「ボストングローブ紙」で紹介されたというのです。



その部分だけをここに紹介します。

But don't miss, too, a display of works by younger artists, all of them from Fukushima, The city devastated by a nuclear accident in Mach 2011. CWAJ responded to the disaster with a number of programs aimed at children, one of them a printmaking course. The resulting works — including second grader **Sumika Saito's** "My Treasure," a drypoint Rendering of sneakers, and second grader Hikari Fukaya's jaunty collagraph "Marathon Race" — are wonderful.

今回2011年3月の原発事故で被災した福島若手アーティストが制作した作品の展示も見逃してはならない。一般社団法人CWAJ（カレッジ・ウィメンズ・アソシエーション・オブ・ジャパン）は被災した子供たちに向けた複数のプログラムを実施してきたが、その取り組みの一つが版画である。（須賀川三中）2年生の齋藤好花さんがスニーカーをドライポイントで表現した「私の宝物」と、（須賀川二小）2年生の深谷光里さんの元気ではつらつとした紙版画の作品「持久走記録会」などは、とても素晴らしい。

「音楽に国境はない」と言われます。美術作品も似たような特徴があります。授業中にクラスメートと一緒に制作した好花さんの作品が、遥（はる）か遠くのボストン市民の目に留（と）まり強烈（きょうれつ）な印象を残したということ、全校生、保護者の皆さんとともに喜びたいと思います。

市民交流センターのPR冊子には木賊さんの牡丹画



左の作品は、今年の牡丹絵画展に出品した美術部の木賊（とくさ）いずみさん（3年生）の作品です。

須賀川市市民交流センターにおける準備企画として発行されているPR冊子「すかがわ めくるめく02」第2号（10月下旬発行予定）の連載ページ「いま、出会う風景」というコーナーに1ページを割（き）いて紹介される予定です。

編集の方が牡丹会館に展示されていた数多（あまた）ある作品の中からぜひ採用したいと気に入ってくださり、この企画が実現したそうです。

木賊さんが、インタビューに答えて「3年間の集大成としてすべての力を注（そそ）ぎこんで、見たままを描いた」と言うとおり、花びらや葉の一枚一枚の形状の実に写実的（しゃじつてき）なこと、色彩の濃淡と全体のコントラストも実に見事な作品です。

2年生は中学校生活の折り返し地点

中間テストが終わった後、2年生の男子が一人で廊下(ろうか)を歩いているところに出くわしました。

私から「いよいよ中学校生活の折り返し地点だね。」と声をかけると、「ああ、そうなんですね。」と返してくれ、こんな会話が続きました。

「勉強も頑張(がんば)らないとね。」

「そうですね。」

「進学したい高校は決まってるの。」

「……。」

「今度の三者相談の時には、『その高校は今の学力では難(むずか)しいね。』とか、『もっと頑張らないと厳(きび)しいよ。』と言われたっていいんだよ。」

「えっ、そうなんですか。」

「志望校は今からあきらめる必要ないし、むしろ今からあきらめてはだめだよ。だって、中学校生活の折り返し地点なんだもの、これからが大事だよ。」

「そうなんですか。」

「3年生の三者相談の時までに、少しずつ成績を上げて、『もう一息だよ。』『この調子だよ。』と言われるように、この折り返し地点から、頑張

ってみなよ。」

この生徒は、たぶんこの瞬間(しゅんかん)にはその気になってくれたらと思います。しかし、実行に移そうという決意を促(うなが)すことができたかについては、不安が残ります。

たぶん、この生徒は、これまでどおりの取り組みでは成績を向上させることが難しいと考えていると思います。それが、私の励ましに対する「えっ、そうなんですか。」という反応に表れています。とすれば、これまでの授業の受け方や家庭学習の取り組みを思い切って捨てる覚悟(かくご)が必要です。そして次に、どのように授業を受けるのがよいのか、どのように家庭学習を進めていけばよいのか、お手本になる生徒を探して真似(まね)でもよいから実行する決意を持つことです。

何もこの生徒が特別なわけではありません。多くの生徒が、この生徒と同じような状況にいます。折り返し地点での決意を持ち、希望に近づいていってほしいと思います。



考えさせられる「わが身を削って人に尽くす」生き方

92歳の版画家 森本利根(もりもと・とね)様から子どもの本の店・クレヨンハウスを通じて、大人向けの絵本「喜多方のおばあちやま」をご寄贈いただきましたので紹介します。

幕末から明治を生きた現：喜多方市の瓜生岩子(うりゅう・いわこ)という女性をご存知でしょうか。恥ずかしながら、私はこの本を手にするまで知りませんでした。

普通なら挫折(ざせつ)しても不思議ではないほどの壮絶(そうぜつ)な前半生を送りながら、身寄りのない子の面倒をみ、戊辰(ぼしん)戦争で負傷した兵士を敵味方なく手当てし、後半生は、多方面での福祉活動を進んで行き、子どもたちへの教育、女性の自立のための裁縫(さいほう)学校の設定、育児の指導やお産婆(さんば)さんの育成にも力を注ぎました。「社会福祉の母」とも「日本のナイチンゲール」とも評価され、女性初の藍綬褒章(らんじゆほうしょう)を受けています。寄贈書には、美しい絵とともに、飾り(かざ)のない簡潔(かんけつ)な文章で、「わが身をけずって人のために生きた」彼女の生き様が描かれています。

渋沢栄一(しぶさわ・えいいち)からの依頼を受け、東京の福祉施設で働いたこともあることから、東京の浅草、浅草寺に彼女の銅像が建てられています。今年の修学旅行では、その銅像に手を合わせ、彼女の志の何分の一かでもわが身に取り込めたいと思います。

